

〈授業報告〉

# 「スポーツの価値を考えるポスター展」実施に向けた ゼミナール活動報告

木村華織\*

## 1. はじめに

東海学園大学スポーツ健康科学部では、2020 東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、2020 東京大会）組織委員会との大学連携協定締結以降、オリンピック・パラリンピック教育の推進に取り組んできた。本学部の代表的な取り組みとして、2014 年から 2019 年まで計 6 回にわたり実施してきた「とうがく競技祭」がある。このイベントは、オリンピズムへの理解や多様なスポーツの楽しみ方やその価値について、知識学習および体験学習を通して学ぶことを目的に、毎年 300 人以上の学生を対象に行われてきた学部規模でのオリパラ教育である（木村，2014，2016，2017）<sup>1),2),3)</sup>。その他にも、学園祭やオープンキャンパスを利用したオリンピック・パラリンピックポスター展、名古屋ウイメンズホイールチェアマラソンへのボランティア派遣などを通して、オリンピック・パラリンピックムーブメントの推進に取り組んできた。

しなしながら、新型コロナウイルス感染症の拡大により 2020 年、2021 年の「とうがく競技祭」は中止を余儀なくされた。従来のような大規模なイベント型オリパラ教育の実践は断念せざるを得なかったが、三好キャンパス図書館との連携事業として行ってきたポスター展については今年度も開催することができた。そのため本稿では、ポスター展を目指して進められたゼミナール活動について報告する。

ところで、2020 東京大会の開催を前に、国内ではスポーツの社会に果たす役割や価値が強調されるようになった。スポーツ庁は、第 2 期スポーツ基本計画「第 2 章：中長期的なスポーツ政策の基本方針」において、「スポーツで人生が変わる」「スポーツで社会を変える」「スポーツで世界とつながる」「スポーツで未来を創る」という 4 つの観点からスポーツが貢献できる価値を掲げている（文部科学省，2017）<sup>4)</sup>。学術分野においても日本学術会議が「科学的エビデンスに基づく『スポーツの価値』の普及の在り方」に関する検討結果を報告している（日本学術会議，2020）<sup>5)</sup>。国際的にみれば、スポーツを通じて社会問題を解決しようとする取り組みは、これまでも国際連合等を中心に進められてきた。「開発と平和のためのスポーツ」や「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ (SDGs)」もそのひとつである。スポーツを通じた青年教育と世界平和を目指したムーブメントは、オリンピズムという理念の基に国際オリンピック委員会 (IOC) によって 100 年以上前に開始され、現在は「卓越」「友情」「敬意／尊重」をオリンピックの中心的な価値として位置づけている。国際パラリンピック委員会においても、パラスポーツの推進を通してインクルーシブな世界を創出することを目指すとともに、「勇気」「強い意志」「インスピレーション」「公平」を価値に掲げている。このように、国内では 2020 東京大会を機に、国際的にはそれよりも以前からスポーツのもつ社会的・教育的価値に着目した取り組みが展開されている。

「スポーツの価値」が国内で論じられるようになった今日にあって、体育・スポーツ系学部をもつ高等教育機関には、スポーツの価値を認識し卒業後の社会生活において主体的に発信していくことのできる学生教育が求められている。従来、筆者のゼミナールで行ってきたポスター作りとポスター展は、オ

\* 東海学園大学スポーツ健康科学部

オリンピック・パラリンピックの基礎知識や歴史を紹介するに留まっており、スポーツの価値について学生自らの経験や専門競技と関連づけて思考を巡らせ、学生自身の言葉として表現するには至っていなかった。したがって、体育・スポーツ系学部にいる学生が、自らの専門競技の価値を改めて認識する必要があるという問題意識から、従来のオリパラポスター展を「スポーツの価値を考えるポスター展」と題して取り組むこととした。

以上、本稿では、オリンピック・パラリンピック教育（以下、オリパラ教育）の一環として実施した「スポーツの価値を考えるポスター展」開催までの学習プロセスと学生たちから紡ぎ出されたスポーツの価値について、ポスターの内容を中心に紹介する。本学習は、昨今重要視されているメタ認知教育について、オリパラ教育やスポーツの価値教育を通じてその学習方法を見いだそうとする試みでもある。

## 2. ポスター作成までの学習プロセス

ポスター完成までの学習は、舛本（2012）が示すオリンピック教育のプロセス「知識学習：オリンピックについて学ぶ」、「体験学習：オリンピックを通して学ぶ」、「実践学習：スポーツ実践の中でオリンピックを学び、身につける」に基づきながら、適宜アレンジを加えて行った。

オリパラ教育については、東京都教育委員会<sup>6)</sup>、筑波大学オリンピック教育プラットフォーム(CORE)<sup>7)</sup>、日本体育大学オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業(N-COPE)<sup>8)</sup>、オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議等<sup>9)</sup>からいくつかの定義や方法が示されている。いずれも、オリンピックやパラリンピックを題材にしながら、理念やスポーツの価値について理解し、社会で求められる資質・能力等を育成していくという点については共通している。本ゼミナールでは、学生たちがスポーツの価値を体験学習やグループ学習を通じて見いだすとともに、ポスター作りを通して言語化し、表現することに重きを置いた。

スポーツの価値を考えるきっかけとして、今回はラグビーを題材に用いることとした。その理由として、1) ラグビーには「ノーサイドの精神」があること、2) ラグビー憲章に「5つのコアバリュー」<sup>10)</sup>が示されていること、3) 日本国籍以外の選手が日本代表チームでプレーすることが認められているなど、その資格が他競技とは大きく異なること<sup>11)</sup>、4) オリンピアンから直接指導を受ける機会に恵まれたこと、があげられる。競技規則の中に独自の憲章を策定し、当該競技が人間形成に資する特徴を明確に示している競技は、他にはみられない。ワールドラグビーでは、「品位」「情熱」「結束」「規律」「尊重」を「ラグビーに関わる全ての人々に共有して欲しい価値観=コアバリュー（World Rugby Value）」<sup>12)</sup>としている。

ポスター展示までの学習プロセスおよび学習内容は図1の通りである。

## 3. 各学習プロセスにおける内容

### (1) 学習プロセス1：知識

はじめに、オリンピック・パラリンピックに関する基礎的知識の学習を行った。両大会の理念や歴史を紹介し、競技大会の位置づけについて「両大会にはオリンピック／パラリンピックという理念があり、理念を世界に具現していく社会運動をオリンピック／パラリンピック・ムーブメントといい、競技大会は理念を普及するムーブメントのひとつであり、頂点である」と説明した。2年次の体育史を受講していない学生の中には、オリンピック・パラリンピックを単なる競技大会と捉えている学生もいたことから、上記の導入学習を行った。その後、各自のこれまでの経験や選手生活を振り返り、オリンピック・パラリンピックの価値と共通するできごとについて発表した。

基礎的学習に続いて、ラグビーを題材に取り上げ学習を進めた。ここでは、ノーサイドの精神、5つ

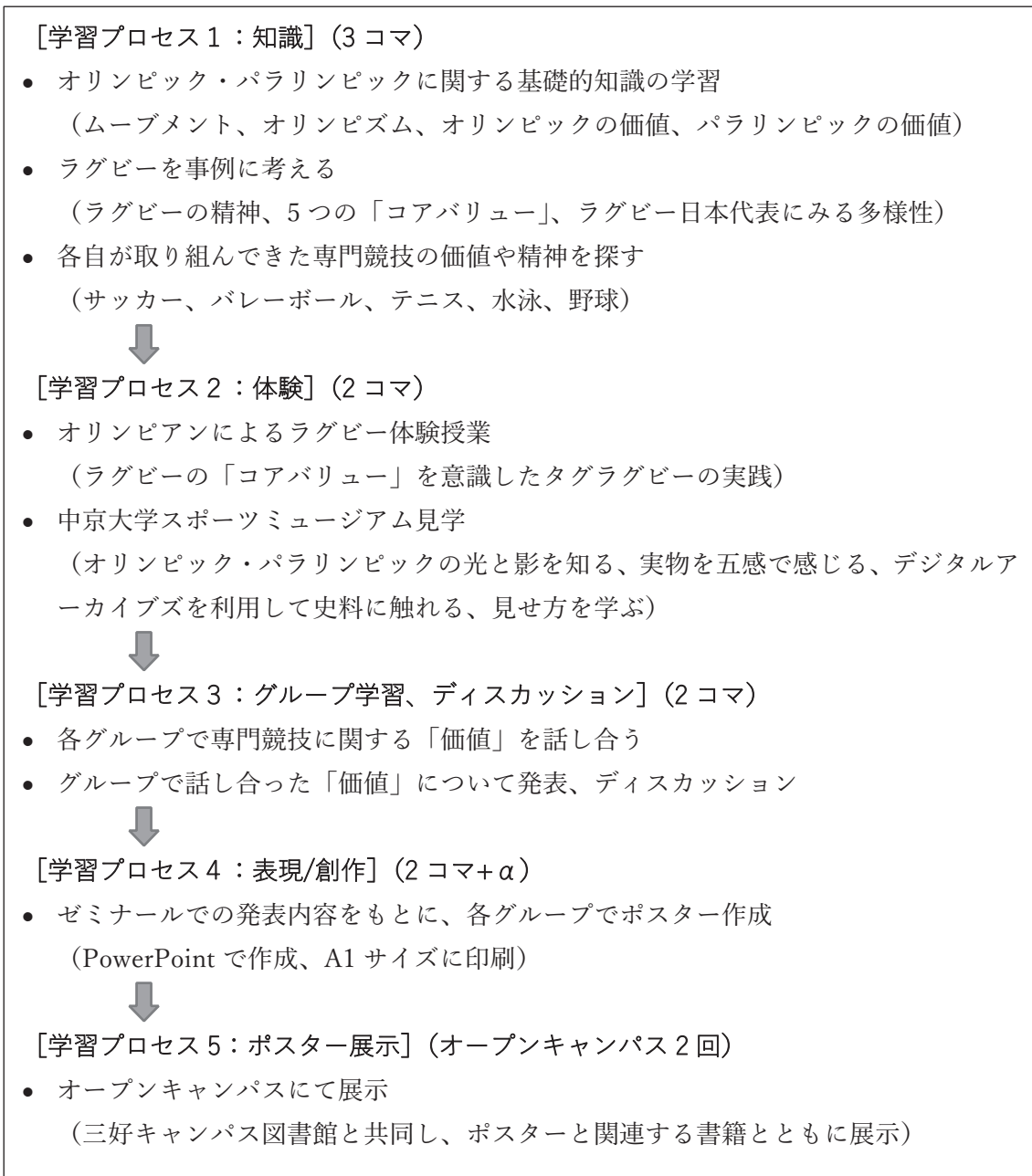


図1. ポスター展までの学習プロセス

の「コアバリュー」について学ぶとともに、日本代表選手や代表になるための資格を取り上げながら多様性についてディスカッションを行った。多くの競技が日本代表資格のひとつに「日本国籍を取得していること」を定めている一方で、ラグビーは代表資格に国籍の定めを設けていない。外国籍を有する選手が多くいるラグビー日本代表に対し「日本代表ではないのでは？」との疑問の声もあげられるが、本当にそうであろうか。何をもって日本代表なのか、社会の中の一部としてスポーツを捉えた場合、ラグビーからは何が見えるのだろうか。このように、ラグビーはスポーツを社会の縮図と捉え、興味深く議論できる題材を多く含んでいるため、スポーツの価値を学ぶのに適切であると考え用いることとした。

知識学習の最後に、学生たちが取り組んできた専門競技について、その精神やバリューを競技団体のホームページや規程等から探し、セミナール内で報告した。日本サッカー協会においては「リスペクト宣言」が出されており、リスペクトの本質を「常に全力を尽くしてプレーすること、それはフェアプレーの原点である」としている。この宣言には、「フェアプレーとは」「JFA サッカー行動規範」「グリーンカー

ド制度」について示されていた。また、日本野球連盟は「日本野球連盟 基本理念」及び「社会人野球活動指針」を設けていた。バレーボール協会からは「バレーボール 2015 宣言」が出されており、「JVA はバレーボールの“つなぐ力”を育みます」とし、「つながり」をキーワードに人材を育成する方針を示している。多くの競技団体に憲章や宣言が出されている状況は確認できたが、ラグビーのように競技団体として明確に価値を打ち出している競技団体は今回の検討ではみられなかった。

## (2) 学習プロセス 2：体験

体験学習は、実際にラグビーにチャレンジすることからスタートした。本時の講師である兼松由香氏(2016年リオデジャネイロ大会ラグビー女子セブンス日本代表)から、ラグビーのコアバリューの説明とそれらのバリューがどのようなプレイ場面に関係してくるのかについて説明を受けた。その後、実際にコアバリューを感じられる要素を盛り込んだ簡易ゲーム、タグラグビーが展開された。学生からは「コアバリューを意識するかしないかでプレーが変わってくる」という声があげられた。ラグビーにおいては、ゲーム中に選手が審判に対して抗議する場面はほとんどみられず、逆に審判の説明を聞いている選手の姿を目にすることが多い。ラグビーの発展の道筋はもとより、こうしたバリューの存在がプレーの質やプレー中の選手の態度自体を変えていくことを、体験およびオリンピックの指導を通じてよりリアルに感じ取ることができた。

2つめの体験学習として、中京大学スポーツミュージアムに出掛けた。ミュージアム見学では、1) スポーツの光と影について展示を通して学ぶこと、2) ホンモノ(展示されている現物)とデジタルアーカイブに触れること、3) ポスターを作成する際のヒントを得ること、を目的とした。ミュージアムには、スポーツの影を示す象徴として1980年モスクワオリンピックの金メダルが展示されている。この大会は東西冷戦の影響により日本がボイコットした大会である。政治的影響によって多くの選手がオリンピック出場への夢を絶たれた。学芸員によってこのメダルの意味が学生たちに説明され、今まで考えることのなかったスポーツの影の側面を学生たちに印象づけた。その他にも、オリンピック・パラリンピックに参加した選手、コーチ、関係者に与えられる「参加メダル」のこと、日本における女性スポーツの歴史などについて説明を受けた。その後は各自で観賞する時間とした。ミュージアムに準備されているクイズに答える者、デジタルアーカイブにアクセスして当時の史料やグッズ、玩具に興味を示す者、丁寧に展示をみて回る者、プロジェクターから流されていた「性の多様性」のVTRを食い入るようにみる者など、ミュージアムにある展示物が学生たちの興味関心を刺激しているように見え、90分の見学時間はあっという間に過ぎていった。

## (3) 学習プロセス 3：グループ学習、ディスカッション

ここでは自らの考えを他者と共有し、考えの幅を広げ、互いに思考を深めていくことを目的に、グループ学習、ディスカッションを中心に授業を展開した。ここからはポスター作成を前提に4つのグループに分かれて活動することとした。A・Bグループはサッカーを専門とするグループ(3人ずつ)、Cグループは野球(2人)、Dグループはバレーボール、水泳、テニスの混合グループ(3人)である。これまでの学習を踏まえた上で、グループ毎に自分たちの専門競技の価値について光と影の両側面から意見を出し合った。次に、グループ内の意見をPowerPointにまとめてゼミナール内で発表し、発表後は各グループの内容について全員でディスカッションした。

詳細は後述するが、サッカーを専門とする2つのグループ間(A・B)でも両者が考えるサッカーの価値には違いがあり、サッカーを専門としない学生たち(いわゆる外野)からあげられたサッカーの価値もまた経験者が考えるものとは異なるなど、グループや個人の経験によって複数の価値が彼らの中から見いだされている点が印象的であった。



2021年度は春学期の途中で緊急事態宣言が発出され、学内の活動レベルも引き上げられたため授業形態が一定期間オンラインに変更になったことから、対面授業が再開されるまでの期間はWebオンラインツール Teams を利用した同時双方向型授業を行い、グループ学習には同ツールのブレイクアウトルームを使用した。

#### (4) 学習プロセス4：表現 / 創作

グループ内での意見集約、ゼミナールでのディスカッションを終え、いよいよポスター作りに取りかかった。ここでの目的は、自らの考えを他者に伝わる言葉にして表現することであった。ポスターを構成するコンテンツとして、次の3点を含めるよう指示した。取り上げた競技の「価値」と「負の側面」、さらに「その価値は社会生活にどういかせるのか」である。ポスターはPowerPointで作成し、スライド1枚に収めるようにした。

このプロセスで学生たちが苦勞したのは、1) 考えたことを言語化すること、2) それぞれの価値を社会と結びつけて考えること、であった。グループ発表においてある程度は説明できていたものの、いざ限られた紙面の中で説明しようとするとなかなか進まない。このプロセスは、自分の知識や考えを他者に伝わる言葉に変換する手法を身につける上で重要になる。また、ポスターという特性上、閲覧者の視覚にアピールすることも必要になるため、短い言葉で伝えたいことを表現すること、閲覧者にとって見やすいこと、興味を引きつける構成になっていることが求められる。これらは自分自身の思いや考えを鮮明にするとともに、相手の立場に立って物事を創り上げていくことに繋がる。自らの考えや調べたことをPowerPointにまとめプレゼンテーションする授業は多くみられるが、自らの考えを限られた字数の中で他者に伝わる言葉に変換して伝える学習活動として、ポスター作りは有効な学習手段である。


## 4. ポスターの内容

以降では、本ゼミナール3年生が作成した4枚のポスターについてみていきたい。先述の3つのコンテンツを含めること以外は各グループに任されているため、デザインや表現方法は様々であった。各グループで紡ぎ出した「価値」「負の側面」「社会との繋がり」について、ポスターの内容を取り上げながら紹介する。


### (1) サッカー A:「サッカーは、人生のミニチュア!?」

タイトルからも分かるようにこのグループでは、サッカーを通して体験するできごとを人生の縮小版のように捉えてポスターを作成していた。価値には、「国際交流」「思いやり」「チャレンジ」をあげている。幼少期からサッカーをしていた学生たちは、子どもの頃に外国人の子どもたちとの交流試合を行っており、その中で言葉が通じなくとも意思疎通が図れた経験をしていた。また、「思いやり」と「チャレンジ」

## サッカーは、人生のミニチュア!?



### サッカーの価値



国際交流

思いやり

チャレンジ

- ・海外との交流が多い  
・特にプロは、国際試合が多い  
・お互いの意見を認め尊重しあう
- ・直接プレーに関係がなくても、味方のために走る  
・味方のミスを取り返す  
・一つ一つのプレーにメッセージがある
- ・ミスが許されているスポーツ  
・前向きな姿勢  
・ミスを恐れない

サッカーの負の側面…  
チームスポーツである分、「誰かがやるだろう」といった気持ちが出てしまい、一人一人の責任感が薄れてしまう。

↓


社会と繋がると…

#### サッカーと社会の繋がり

サッカーの価値は、スポーツだけではなく社会で生きていくためにいかすことができる。サッカーで得られる3つの価値は、社会で生きていくための力に変換できる。


- ◆国際交流…小さい頃から異文化に触れることで他人への偏見をなくすることができ、他人の意見を尊重する力が身につく。
- ◆思いやり…味方のために走る事や味方のミスを取り返すことは、社会に出た時に誰かのために動くことや誰かの失敗をみんなで取り返すこと、フォローすることに繋がる。
- ◆チャレンジ…サッカーで失敗を恐れない、前向きな思考になるということは、社会に出た時に失敗を恐れなかったり、積極的に活動することに繋がり、それは何かを生み出す力になる。

このように、サッカーは自分の捉え方次第で自分を成長させてくれるものであり、サッカーの価値が自分の価値を高めることに繋がると考える。



**振り返り**

サッカーを通して得られた価値は、人生を生きぬく力としていかすことができる。サッカーを通して自分を知ることができる。私たちはサッカーは個人の人間成長との関わりが深いと感じた。皆さんは、サッカーの価値についてどう考え、どういかしますか? 皆さんが行っているスポーツに置き換えて考えて考えてみてください。





ている。「年代、性別、環境の差」については、女子選手はプロ選手であっても生活をするのもままならない現実など、多くの面で未だ格差が存在していることを問題視している。

サッカーと社会との繋がりについては、サッカーの現実的な課題「負の側面」を指摘しつつ、サッカーのもつ特徴や価値をいかにして良い方向に転換していくのかという点について、彼らなりの見解が書かれている。以下に引用しておきたい。

サッカーと社会の繋がりを考えてみた時に経済、人との関わり、お金、国同士のつながりなど多くのものがあると思う。そのものには必ず「光の部分」と「影の部分」が存在しており、多くのものは「光の部分」だけが目立ち、「影の部分」は全くと言っていいほど見えない。サッカーは影の部分に負の要素が沢山ある。人種差別やラフプレー、誹謗中傷、集団での反社会的行為。これはトップ選手だけでなく育成年代のカテゴリーにも言えることである。また、サッカーはサポーターや監督、コーチなど関わる人たち全てが影響を与える存在だ。では、どうすればもっと魅力的なスポーツになるのか。それはサッカーというスポーツの特徴である集団という組織を使いながら、あらゆる個々を組み合わせていき、一人一人が価値を見出そうとすることだと考える。サッカーというスポーツは自分のライフスタイルにより大きく変化し、立場もサッカーに対する考え方も全員が同じではない。個々で感じる価値をサッカーに還元する。それを集団でやり大きなものとしていく。全員がサッカーに対する考え方をいつもより少し変えるだけで、サッカーというスポーツがもっと輝くのではないかと私たちは強く思う。

### (3) 野球：「野球の価値・魅力」

このポスターは大学野球部で活動していた学生が作成したものである。野球の価値・魅力を「結束力」「攻守で道具が違う」「個人の要素が強い」にまとめている。他の競技と大きく異なる点として「攻守で道具が違う」ことをあげ、これにより自分の長所と短所が分かりやすく、自分と向き合わせてくれるという。「結束力」では協調性が身につくことをあげた一方で、「個人の要素が強い」ことを価値にあげ、勝負や瞬間の判断を要する場面が多くあるため、判断力や自分で考える力が身につくとしている。野球の持つ負の側面として、「松井秀喜5打席連続敬遠!？」をあげている。「敬遠」という戦略によって見事勝利を収めたチームがある一方で、松井選手はこの試合のすべての打席を敬遠され、また敬遠したチームに対してはスタンドから物が投げ込まれ、それを負けたチームの選手たちが拾うという一幕があった。敬遠はルール違反でもなく、勝利するための戦略ではあるものの、この一幕は野球の価値や魅力とは裏腹な状況が生じてしまった場面といえよう。この敬遠に対しては「戦略を徹底し、最善を尽くしている」「挑戦することも必要である」など賛否が分かっていた。「この敬遠が正しいのか、そうでないのかは自分たちには分からないが、いずれも社会において生じてくること」であるだろうとまとめていた。

## 野球の価値・魅力

私たちが考える野球の価値・魅力

<p><b>結束力</b></p> <p>コミュニケーションが重要だったり全員でまとまって行動することが多いため、<b>協調性</b>が身につく。</p>	<p><b>攻守で道具が違う</b></p> <p>攻守で動作や道具が違うため長所や短所がわかりやすく、自分と向き合うことができる。</p>	<p><b>個人の要素が強い</b></p> <p>1対1の勝負や瞬時の判断を要する場面があるため<b>判断力</b>や<b>自分で考える力</b>が身につく。</p>
---	--	--

**松井秀喜5打席連続敬遠!?**

野球の負の部分の一つとして「敬遠」が挙げられる。1992年の夏の甲子園、明徳義塾高と星陵高の対戦で松井秀喜が5打席連続敬遠されるというできごとがあった。敬遠したチームにはスタンドから物を投げ込まれたり、批判や苦情が殺到し、松井秀喜が一度もバットを振ることなく試合を終えた。その一方で、この作戦が功を奏して明徳義塾高は一点差で勝利を収めた。



グラウンドに投げ込まれたものを拾う選手たち

**振り返り**

今まで考えることのなかった野球の価値や負の面を考え深堀することで、野球というスポーツの見え方が変わり、一選手としてまたこれから指導者になるために考え方を見つめなおす機会になった。

**野球が社会にどう生きるのか**

5打席連続敬遠の賛否の意見として、「戦略が徹底されており、最善を尽くしている。」「結果だけでなくその過程も大事であり、挑戦することも必要である。」などがある。この敬遠の件でどちらが正しいかはわからないが、これらの意見はどちらも社会において重要である。また上記の野球の価値において身につく**自分で考える力**や**判断力**、**協調性**は社会において必要不可欠で生かしていくべきである。



#### (4) テニス・バレーボール・水泳：「多種目から見たスポーツの社会的価値」

このグループは、専門競技の異なる3人によって構成されたグループである。互いの競技についてディスカッションする中で、これまで気がつかなかった専門競技の価値について気づく機会となったようだ。それぞれの価値と負の側面についてみてみよう。テニスは個人競技であるが故に、競技をすることで自分を見つめ直すことができ、プレッシャーにも耐えうる精神力を身につけられる。一方で、自分一人で何でもするという意識が強く、他人に相談することが逃げや甘えであるかのように捉えてしまうという。バレーボールでは、ボールを繋ぐことはコミュニケーションでもあり心を繋ぐことを可能にする、またサーブ、レシーブ、ブロックなどひとつのプレーを極めることで輝くことができる点に価値があるという。その反面、高身長という自分では解決できない体格による格差があることや旧態依然の固定概念に囚われた雰囲気があると述べている。水泳については、タイムで自分の頑張りや立ち位置が分かるため、努力することの大切さを実感したり、自分を見つめ直したりする力を養えるという。一方で、プールという施設が必要となることから、インフラが整った裕福な地域でしか行うことができない点や肌の露出による差別が増えることを負の側面としてあげていた。

それぞれの価値が社会でどのように活かされるのかについてテニスでは、自分に向き合うスポーツであるため自分で苦手な部分を理解し、カバーすることができる。バレーボールでは、ポジションの役割がはっきりしているスポーツであるため、社会に出ても自分の立場や役割、自分の個性を理解して力を発揮することができる。水泳は個人競技であり水中という特殊な環境が故に、精神面が強化されていることから大変な状況にあっても強い精神力で乗り越えられ、それぞれの見解を述べている。3競技を比べると個人競技からは、自分と向き合う、自分を見つめることができる競技としての特性があげられ、集団競技であるバレーボールからは、集団の中でどう自分の力を発揮するかなど、周りと協働する中で力を発揮していくことに価値を感じていることが読み取れた。

### 多種目から見たスポーツの社会的価値

#### テニス

- ・ 体調や道具の管理を自分で行わなくてはならないことから、自分を見つめ直すことができる
- ・ 多くても仲間が一人という少ない人数だからこそそのプレッシャーなので大抵のプレッシャーに慣れる

#### バレー

- ・ ボールを繋ぐだけでなく、仲間とコミュニケーションを取ることで心もつながることが出来る
- ・ サーブ、レシーブ、ブロック等、1つのプレーを極めることでピンチサーバーやワンポイントブロッカーの様にワンプレーで輝く事ができる

#### 水泳

- ・ 個人競技であるからチームで練習する時に仲間との信頼感がより深まる
- ・ タイムで自分の頑張りや立ち位置がわかる。努力する事の大切さや自分を見つめ直す力を養う事ができる

#### 価値

#### 負の側面

#### 3つの競技の共通点

負の側面としてマイナス面ではあるが、自分の言動一つで変えることができるものが多く、環境的要因による負の側面はあまりない。

#### スポーツがどう社会に生きるか

#### テニス

・ 自分を見つめなおすことが多いスポーツなので、自分で苦手な部分を理解してカバーする能力がつく

#### バレー

・ ポジションの役割がはっきりしているスポーツなので自分の立場や役割、自分の個性を理解し、社会で発揮できる

#### 水泳

・ 個人競技で水の中という特殊な環境で行うので、精神面が強化されて大変なことがあっても甘えない強いメンタルで生きていける

#### まとめ

全く異なる種目の競技について話し合いそれぞれの競技の良い側面と負の側面があることが分かった。自分の競技を改めて見つめなおし今回のポスター作りを通して、具体的にどう社会に生かせるかを考えることができたしスポーツの素晴らしさを感じることができた。

## 5. スポーツの価値を考えるポスター展

ポスター展は、2021年7月18日と8月8日に開催された本学オープンキャンパスにて実施した。ポスター展は、三好キャンパス図書館との連携事業として開催し、学生が作成したポスターの内容に併せて書籍を選定してもらい、展示した。新型コロナウイルス感染症対策もあり、オープンキャンパスへの来場はすべて予約制となったため、例年よりも少ない来場者となった。多くの人の目に触れる機会をつくることはできなかったが、これまでの卒業生のポスターと併せて展示することなど、これまで以上に内容としては充実した展示であったといえる。





写真、ポスター展の様子（東海学園大学三好キャンパス4号館ロビーにて、撮影：木村）

## 6. おわりに

本稿では、オリンピック・パラリンピック教育の一環としてゼミナールで行った「スポーツの価値を考えるポスター展」開催までの学習プロセスと学生たちから紡ぎ出されたスポーツの価値について、ポスターの内容を中心に紹介した。

ポスターの作成過程で行ったプレゼンテーションやディスカッションは、自分の専門競技が他者からどう見られているのかを知り、これまで気がつかなかった競技の価値や負の側面にも気づく機会となっていた。また、それぞれの競技の価値を社会と結びつけて考えるという課題にはやや苦慮したようであったが、ポスターに記された「サッカーを通して得られた価値は、人生を生きぬく力として生かすことができる。（中略）サッカーは個人の人間の成長との関わりが深いと感じた」、「サッカーが自分の人生の基盤になっている」、「今まで考えることのなかった野球の価値や負の面を考え深掘りすることで、野球というスポーツの見え方が変わり、一選手としてまたこれから指導者になるために考え方を見つめ直す機会になった」、「今回のポスター作りを通して、（スポーツの価値を）具体的にどう社会にいかせるかを考えることができた」などのコメントからは、「スポーツと人生」「スポーツと社会」「スポーツの価値」「スポーツの影」など、少なくとも今まで考えることのなかった視点から、自らの専門競技やスポーツについて振り返り、考えを巡らせたといえるのではないだろうか。

他方、学生たちからは「思っていることはたくさんあるのに、うまく言葉にして表現することができなかった」という声があげられ、伝えたいことが十分にポスターに表現できていない様子もうかがえた。今後の学習においては、自らの考えを言語化し、文字に表現するという学習プロセスを加えることが、学習を展開していく上での課題としてあげられる。

スポーツが単なる娯楽を超えた社会変革のツールとして捉えられる一方で、それを理解している体育・

スポーツ系学部の学生は少ない。競技としてのスポーツ、娯楽としてのスポーツだけでなく、教育や社会で用いることのできるツールとしてのスポーツの価値に関する理解を広げることが、スポーツを単なる「遊び」で終わらせないためには不可欠である。スポーツの価値や2020東京大会レガシーが問われる昨今、専門学部によるスポーツの価値教育は喫緊の課題であろう。

最後に、学生たちが作成したポスターにみる学習成果からは、体育・スポーツ系学部におけるメタ認知教育のひとつの方法として、本稿で取り上げたオリパラ教育やそこでのスポーツの価値教育が有効に機能する可能性が見いだされた。コロナ禍が収まった際には、学生同士のポスターセッションに発展させることやポスターを閲覧した来場者へのアンケートも加えながら教育実践研究として深化させていきたい。

## 参考文献

- 1) 木村華織、黒須雅弘、田中望、出口順子 (2015) 「競技祭」を教材としたオリンピック教育の実践教育活動—「とうがく競技祭 2014」実践報告—、東海学園大学紀要人文学編、第20号：157-175.
- 2) 木村華織、黒須雅弘 (2016) 「とうがく競技祭 2015」実践報告—パラリンピック種目を導入した取り組み—東海学園大学教育研究紀要 (スポーツ健康科学部) 第2号：63-71.
- 3) 木村華織、黒須雅弘 (2017) 「とうがく競技祭 2016」実践報告—実行委員へのアンケート調査からみる評価と課題—、東海学園大学教育研究紀要 (スポーツ健康科学部) 第3号：77-85.
- 4) 文部科学省 (2017) スポーツ基本計画、スポーツ庁ホームページより参照。  
[https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002.pdf) (2021年12月10日現在)
- 5) 日本学術会議科学的エビデンスに基づく「スポーツの価値」の普及の在り方に関する委員会 (2020) 提言「科学的エビデンスを主体としたスポーツの在り方」、(2021年12月10日現在)
- 6) 東京都教育委員会ホームページ「東京都オリンピック・パラリンピック教育」  
<https://www.o.p.edu.metro.tokyo.jp/about-education> (2021年12月10日現在)
- 7) オリンピック教育プラットフォーム (CORE) <https://core.taiiku.tsukuba.ac.jp/about> (2021年12月10日現在)
- 8) 日本体育大学オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業 (N-COPE)、  
<https://www.nittai.ac.jp/ncope/education/index.html> (2021年12月10日現在)
- 9) オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議 (2016) オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告、  
[https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/shingi/004\\_index/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375094\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/004_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375094_01.pdf) (2021年12月10日現在)
- 10) WORLD RUGBY (2022) 「競技規則 (ラグビー憲章を含む)」  
[file:///Users/kaorikimura/Downloads/World\\_Rugby\\_Laws\\_2022\\_JA.pdf](file:///Users/kaorikimura/Downloads/World_Rugby_Laws_2022_JA.pdf) (2022年1月1日現在)
- 11) WORLD RUGBY 競技に関する規程第8条「国の代表でプレーする資格」において、以下のように規定されている。a) 当該国で出生している、または、b) 両親、祖父母の1人が当該国で出生している、または、c) プレーする時点の直前の36ヶ月間継続して当該国を移住地としていた (2022年1月1日からは移住条件が60ヶ月以上)。JAPAN RUGBY ホームページ、<https://www.rugby-japan.jp/news/2020/08/06/50516> (2021年12月10日現在)
- 12) 「5つのコアバリュー」は、ラグビー憲章「The World Rugby Playing Charter」の一部を構成するものであり、そこには「品位・情熱・結束・規律・尊重」の5つの価値が示されている。この言葉は、選手、指導者、トレーナー、メディカル、レフリー、スタッフ、関係者、ファンなど、ラグビー

に関わる全ての人々に共有してほしい価値観であり、全員が心を一つに一体感を持つ、すなわち One Team となるための最も基本となる考え方、価値観であるとされている (JAPAN RUGBY 公式ホームページ、<https://www.rugby-japan.jp/future/corevalues> 参照)。